

333 Flow Cytometry による大腸癌のDNA Ploidyと進行度および予後との関連についての研究
三重大学第2外科

山本隆行, 松本好市, 鈴木宏志

【目的】Flow cytometryを用いて大腸癌のDNA ploidyと進行度および予後との関連を検討した。

【対象】術後2年以上を経過し, 転帰が明らかで, 標本の利用が可能な大腸癌切除症例224例を対象とした。

【結果】腫瘍のDNA ploidyは110例がdiploidで, 114例がaneuploidであった。肝転移陽性率やstageの進行した症例の頻度はaneuploid症例で有意に高かった。術後再発率はdiploid症例が40.8%, aneuploid症例が20.2%で, diploid症例で有意に高かった。肝転移再発の頻度はdiploid症例で有意に高かった。術後生存率では両者の間に有意差を認めなかった。

【結論】DNA ploidyと進行度との関連ではaneuploid症例に進行例が多かったが, 予後との関連では有意な相関を認めなかった。再発との関連では, 進行例が多いaneuploid症例で再発率が低く, また同時性肝転移がaneuploid症例で多いのに対して, 異時性の肝転移再発はdiploid症例で多いという相反した結果が得られたが, これらの原因の1つには, 全症例に施行されている化学療法に対するdiploid症例とaneuploid症例の感受性の差が関与しているのではないかと考えられた。

334 大腸癌における糖脂質抗原の生化学的、免疫組織学的解析と予後因子としての有用性

県立愛知病院外科¹⁾、名古屋保健衛生大学外科²⁾、愛北病院外科³⁾、名古屋大学第2外科⁴⁾
坂本純一¹⁾、渡辺正²⁾、浅井秀司³⁾、桐山幸三⁴⁾、安江満悟¹⁾、伊藤勝基⁴⁾、高木弘⁴⁾

【目的】腫瘍関連抗原は細胞表面に局在し、細胞間の認識機構、分化、癌遺伝子生成産物の発現などに重要な役割を果たしている。大腸癌においてはグロボシド、ガングリオシド等の糖脂質抗原がこのメカニズムに関与しており、抗原発現と予後との生化学的、免疫組織学的統計的解析によりこの相関を明らかにした。

【対象と方法】治癒切除進行大腸癌202例において各種糖脂質抗原エピトープに対するモノクローナル抗体を用い、免疫組織学的抗原発現と予後との関係を検討した。また、一部症例において唾液糖蛋白によるSecretor Statusの検索、薄層クロマトグラフィーによる抽出糖蛋白の生化学的解析を行い、統計データとの整合性を検討した。

【結果と結論】ガングリオシド、Sialyl-Lea ($P < 0.01$)、Sialyl-Lex ($P < 0.05$)の発現は予後不良、またグロボシド、Leaの発現は予後良好の指標でありSecretor Statusの検索、生化学的解析の結果との整合性が確認された。

335 大腸癌症例における α -1-Antitrypsinの発現について

九州大学生体防御医学研究所 腫瘍外科¹⁾、大分県立病院外科²⁾ 三森功士¹⁾、森 正樹、坂田敬、李 健、本田雅之、浜田健二、中島秀彰、井上裕、有永信哉、上尾裕昭²⁾、秋吉 毅

【目的】 α 1ATの大腸癌及び肝組織における発現について、mRNAレベルで検索し、大腸癌の浸潤・転移における意義について検索したので報告する。【方法】Chirgwinらの方法により15例の大腸癌組織(T)と非癌部粘膜組織(N)および切除後の肝転移症例9例の肝転移巣(TL)および非癌部正常肝組織(NL)から、total RNAを抽出。 α 1AT約500bpをプローブとして、Northern blotを施行した。【結果】1)(a)大腸癌原発巣ではT、N共に α 1AT mRNAの発現を認めた。(b)原発巣で強い発現のみられた例は、2/15例であった。2)NLでは9例全例に強い発現を認めたが、TLは2例で全く発現がなく、4例では弱い発現を認めた。【結論】少なくともmRNAレベルでの検索では、 α 1ATの大腸癌の浸潤・転移への関与を積極的に示唆する所見は得られなかった。免疫染色を行った報告と考え合わせると、癌浸潤部の一部の陽性細胞が浸潤・転移に特に関わっている可能性もあるが、肝転移巣でのmRNA発現が弱く、これも否定的と考えられた。

336 胸部食道癌3領域郭清症例における血中サイトカイン測定の意義と術後肺障害
大阪市立大学第二外科

竹村雅至 東野正幸 大杉治司 徳原太豪 認野 進 徳山彰俊 藤原耕三 船井隆伸 加藤 裕 木下博明

【目的】胸部食道癌に対する根治術後におけるサイトカインの誘導と生体に与える影響を検討した。

【対象と方法】最近の胸部食道癌症例で3領域リンパ節郭清・後縦隔胃管再建を行った11例を対象とし、術後に顆粒球コロニー刺激因子(G-CSF)と、IL-1 receptor antagonist(IL-1ra)を経時的に測定しこれらと術後経過および肺機能との相関を検討した。

【結果】G-CSFは術3時間後に、またIL-1raは術開始6時間後で最高値をとった。IL-1raは手術時間・開胸時間と正の相関を認めた。しかし、出血量はG-CSF・IL-1raいずれとも相関を認めなかった。また、肺動脈血酸素分圧はG-CSFと負の相関を認めたが、開胸時間・手術時間・IL-1raとは相関を認めなかった。

【結語】侵襲に対する防御反応は手術開始直後から起こると考えられ、手術時間特に開胸時間が最も強く影響していることが示唆された。IL-1raが肝から急性相蛋白が産生される以前に検出されるため、その測定は手術侵襲の予測に有用であると思われる。